ほうこん
題字・清水英夫

GALAC・12月号・付録
2023年12月6日発行（毎月1回6日発行）
昭和43年3月8日第三種郵便物許可
〒160−0022
東京都新宿区新宿5−10−14　中村ビル2F
NPO法人放送批評懇談会
TEL（03）5379-5521／FAX（03）5379-5510
ホームページ　https://www.houkon.jp/
Eメール　kondankai@houkon.jp
編集・川喜田尚

「放送批評懇談会 ギャラクシー賞60年史」まもなく完成！

―11月理事会報告―

2023年10月24日、10月理事会をZoomミーティングにて開催した。

1．委員会活動報告

◇出版編集委員会　鈴木委員長

・10月13日にZoomで委員会を開催した。

・「GALAC」2024年1月号特集は「第61回上期ギャラクシー賞」。また、『ギャラクシー賞60年史』刊行に際し、藤田真文60周年担当による放送批評懇談会60年の歩みを含めた特別寄稿を掲載予定。表紙は満島真之介さん、ザ・パーソンは大森淳郎さん（元NHK放送文化研究所、『ラジオと戦争』著者）。

・2月号は2年ぶりのドラマ特集として「配信時代のドラマ制作」（仮題）を予定。現在のドラマ制作現場の抱える課題や新しい技術による制作手法などで構成する。特集詳細は鋭意検討中。

・同号では、国際紛争の激化が懸念されるなか、国際報道の重要性の高まりを受けて、特別記事として連載「NEWS WATCHING」執筆メンバーの一人である伊藤友治さんに、国際報道に特化した寄稿を依頼した（連載あるいは不定期連載という形で継続予定）。

・元読売テレビで演出家の鶴橋康夫さんの訃報（10月17日発表）を受け、追悼記事を掲載する。

・さらに、10月25日開催の放懇ウェビナーの抄録も掲載予定。

◇選奨事業委員会

第61回ギャラクシー賞上期応募作品数は、テレビ部門171本（前年比マイナス26本）、ラジオ部門51本（前年比プラス1本）、CM部門130本（前年比マイナス32本）、報道活動部門11本（プラス4本）となった。テレビ部門は昨年度が例年よりかなり多かったため、例年と比べれば増加傾向といえる。CM部門はテレビCMが大幅に減ったが、ウェブCMは増加した。

〈テレビ部門〉　桧山副委員長

・9月27日にZoomで月評会を開催した。9月度月間賞には、土曜ドラマ「最高の教師　1年後、私は生徒に■された」（日本テレビ）、レギュラー番組への道「危険なささやき」（NHK）、NHKスペシャル「〝冤罪〟の深層～警視庁公安部で何が～」（NHK）、連続テレビ小説「らんまん」（NHK）の4本を選出した。

〈ラジオ部門〉　仲宇佐副委員長

・10月10日にZoomで定例会を開催した。「関西地区の経済番組」をテーマに「はっしん！夢を掴マネーとfeat. TT」（ラジオ関西）、「日本一明るい経済電波新聞」（MBSラジオ）、「大阪マネー物語」（ラジオ大阪）を聴取し議論を

交わした。

〈CM部門〉家田委員長

・9月21日にハイブリッド形式で定例会を開催し、26作品のCMを視聴した。丸紅「紅丸篇」、ソフトバンク「チチンペイペイ」などのCMが注目を浴びた。「GALAC」12月号特集内、「ウェブCMについて」の対談に向けて、委員の意見交換も行った。

・10月19日にZoomで定例会を開催し、33作品のCMを視聴した。サントリー「WHISKY 100th SUNTORY」、日本マクドナルド　三角チョコパイ「黒とザクザクミルクキャラメル篇」、湖池屋　ピュアポテト「この男、ピュアにつき。篇」などのCMが注目を浴びた。

〈報道活動部門〉茅原委員長

・委員会報告は特になし。

◇企画事業委員会　水島委員長

・10月25日にオンラインセミナー「ChatGPTを使いこなせ!!　放送現場の生成AI攻略法」を開催する。申込者数は119名となった（10／24現在）。

◇広報委員会　滝野委員長

・10月12日にZoomで委員会を開催した。

・10月6日、HP「オリジナルコンテンツ」に〈【座談会】2023年夏ドラマまとめ編〉記事掲載。

・Gメンバー：976名（10／12現在）。

・Gメンバーに放懇セミナー案内を通知し、2名から申込みがあった。

・10月上旬、システム不良でGメンバーに更新手続きのメールが届かず有効期限終了となったため、手作業で更新作業を行った（182件）。

・Gメンバー登録の際の電話認証を、12月1日より導入予定。

・「ギャラクシー賞60年史」

校正作業に時間を要するため、発売日を11月30日（木）に延期することとした。

頒価は冊子版5000円（税込）、電子版4000円（税込）に決定。

印刷部数は1400部予定。

・マイベストTV賞8月度月間ノミネートは、土曜ドラマ「最高の教師　1年後、私は生徒に■された」（日本テレビ）、ファミリーヒストリー「草刈正雄～初めて知る米兵の父　97歳伯母が語る真実とは～」（NHK）、ドラマ8「ブラックポストマン」（テレビ東京）に決定した。

2．その他

①理事選挙・選挙管理委員会の件

選挙管理委員候補を選出した。

今後の理事会　11月30日、12月19日、2024年1月29日

【出席】音好宏、川喜田尚、出田幸彦、桜井聖子、鈴木健司、家田利一、茅原良平、水島宏明、滝野俊一、入江たのし、奥律哉、風間恵美子、国枝智樹、五井千鶴子、小林毅、長井展光、仲宇佐ゆり、桧山珠美、山田健太、中島好登

会議記録

［10月］……

10日　（選奨）ラジオ定例部会

12日　広報委員会

13日　出版編集委員会

19日　（選奨）CM定例部会

24日　理事会

29日　（選奨）テレビ月評会

追悼　隈元信一さん

隈元信一さんが、2023年10月17日に逝去されました。69歳でした。隈元さんは、「GALAC」出版編集委員などを務められ、長く当会会員として活躍されてこられました。その功績に心から感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

隈元信一　くまもと・しんいち
1953年生まれ。鹿児島県種子島出身。ジャーナリスト。東京大学文学部卒業後、同農学部に学士入学。79年から朝日新聞記者。前橋・青森支局、学芸部、韓国高麗大学校客員副教授、論説委員、編集委員、青森県むつ支局長などを経て2017年に退社。著書に『永六輔 時代を旅した言葉の職人』（平凡社）、共著に、『原発とメディア2――3・11責任のありか』『歴史は生きている――東アジアの近現代がわかる10のテーマ』（朝日新聞出版）、『放送十五講』（学文社）などがある。2022年2月刊行の『探訪 ローカル番組の作り手たち』（はる書房）が遺著となった。

ジャーナリスト人生を全う

隈元信一さんと出会ったのは、NHK内にある放送記者クラブだったか。それとも、TBSの市村元さん（現「地方の時代」映像祭プロデューサー）や上智大の音好宏さんが始めた「デジタル時代のテレビジャーナリズム研究会」か。いずれにせよ、四半世紀前のことだ。

当初の印象は、正義感が強い、朝日新聞らしい記者、といったところのように記憶する。周囲をたじたじとさせることもあったが、実は面倒見の良い人情家だった。講師を務めた大学の教え子らも、私のような同業他社の後輩も、丁寧に指導してくれた。放送関係の飲み会では、いつも議論をふっかけて、メディアのあるべき姿を語っていた。

隈元さんは学芸部が長かったものの、農業や医療、韓国文化など、幅広い分野の記事を書いた。その経歴は、遺著となった『探訪　ローカル番組の作り手たち』（はる書房、2022年）の「あとがきにかえて」に、放送作家の石井彰さんが記している。駆け出しの頃、青森支局で原子力の問題に取り組み、編集委員時代に同僚と連載「原発とメディア」を手掛け、新聞記者生活の最後に希望してむつ支局に赴任、核燃料サイクル施設などをウオッチした。

とはいえ、最も深く取材したのは、やはり放送だろう。1953年生まれで〝同い年〟のテレビはもちろん、ラジオにも愛着が強かった。

朝日の連載「ジャーナリズム列伝」で、同僚が著名な新聞人らを取り上げたのに対し、隈元さんが選んだのは、ラジオに携わる人だった。一人は、放送作家であり、ラジオパーソナリティとしても人気を集めた永六輔さん。長年にわたり取材を重ねた永さんについては、後に『永六輔　時代を旅した言葉の職人』（平凡社新書、2017年）を上梓している。

もう一人、「列伝」で紹介したのは、東日本大震災の後、宮城県山元町で臨時災害FM局「りんごラジオ」を立ち上げた高橋厚さんである。町民の声を泣きながら聞き、伝え続けた元東北放送アナウンサーの高橋さんを追った記事は、多様性を重視するベテラン記者ならではの筆致で、読み応えがあった。

新聞社を定年退職後は、民放連の機関誌『民放』に「日本列島作り手探訪」を連載し、地方局の番組制作者を訪ね歩いた。人員や予算が少なくても、地域の課題を息長く取材し、世に問うている人々をインタビューして、酒を酌み交わす。連載をまとめた書籍『探訪』の「まえがき」に、隈元さんは「日本列島には、ジャーナリズム精神がしっかり根付いているな。そう確信できたのもうれしい収穫だった」と書いている。眼鏡の奥の目を細めて笑う顔が、浮かんでくる。

21年9月、隈元さんは末期がんで「余命3カ月から半年」と宣告される。「がんを張り倒す勢いで、がんばろう！」と駄洒落を飛ばしながら、病と向き合った。その闘病記を朝日の言論サイト「論座」で13回にわたり連載。今年10月17日、69歳で旅立つ。

文字通り、ジャーナリストとして人生を全うした。

（共同通信編集委員・原真）

60年の喜怒哀楽を ぎゅっと詰め込みました。

**放送批評懇談会は、おかげさまで今年、創立60周年を迎えました。
発足以来、優れたテレビ、ラジオ、CM作品を審査・贈賞してきた
ギャラクシー賞も2023年、60年の歴史を刻みました。
この度、放送批評懇談会とギャラクシー賞
ふたつの60年の記録として「60年史」が誕生しました。**

発売11月30日(木)

放送批評懇談会の活動とそれにかかわった人たちの記録。ギャラクシー賞が選び抜いた珠玉の作品、日本の放送史に刻まれた優秀作品を一挙に網羅した決定版です。受賞作のタイトルや受賞理由が一覧できるうえに、その作品の制作者データも詳細にフォローされています。それぞれの作品に携わった人たちの熱意と気概が誌面から溢れます。放送関係者はもちろんのこと、テレビ、ラジオ、CMなどの研究者にとっても必携の内容となっています。

- 1963年度の第1回から2022年度の第60回まで、すべての受賞作品を記録。
- 放送日、放送局名、作品内容、受賞理由、スタッフ名などを詳報。

頒価：5,000円（税込）　サイズ：B5判　ページ数：496ページ　編集・発行：NPO放送批評懇談会

放送批評懇談会 ギャラクシー賞 60年史